

しかし、遅くとも一九四一年一〇月中旬になると、赤軍にたいするドイツの急速な勝利はもはや計算できないことが明白になっていた。ロシアの北極海沿岸にある収容所は、もはや言及されることもなくなつた。ポーランド系ユダヤ人、あるいは全ヨーロッパ・ユダヤ人の北部ロシアへの移住という、それまで視野に入っていた計画は、もはや現実的なものではなくなつたということだ。

その結果、ポーランドでもはじめての大量処刑が行われた。スタニスラウという、ハンガリー国境にほどこかい東ガリツィアのある町は、一九四一年までソ連領となつていたが、ここに一〇月、ゲットーが設置されることとなつていた。だが、この街に居住するユダヤ人の規模と比べると、ゲットー予定地となつていた街区はあまりにも小さいように思われた。そこで現地ドイツの責任者たちは、ユダヤ人の数を射殺行動によつて減らすことを決断した。一九四一年一〇月六日と一二日、街の外れでおよそ一万一〇〇〇人のユダヤ人が射殺された。

一九四一年一〇月から一一月にかけての数週間のあいだに、行動部隊、武装親衛隊、通常警察は、数十万人のソ連およびポーランドのユダヤ人を射殺した。同じ時期に、同様に数十万人のソ連捕虜が、国防軍の基幹収容所や通過収容所で亡くなつていく。レニングラ

ードや東部のほかの多くの地域では民間人が餓死し、同様に数十万人の犠牲者を出した。総督府やヴァルテガウでは、ゲットーの死者数は週ごとに増えていった。

一九四一年六月から二月までのあいだに、ポーランドとソ連ではあわせて一五〇万人以上の人びとがドイツの部隊によつて、戦闘行動以外のところで殺害されるか、あるいは餓死している。

### ジエノサイドの決定

このような状況にくわえて、ドイツ指導部にとつてとりわけ重要だったのは、東部戦線での損害の急速な増加であつた。そうした状況が目の前にある以上、ドイツの支配地域にいるユダヤ人を、かつて想定されていたようにシベリアへと連行して、そこで彼らが死ぬのを待つのではなく、その場でただちに彼らを殺してしまつても、ドイツ指導部にとつては、もはや重大な問題ではなかつたのだ。ただ、ソ連で行われていたような大量射殺は、ドイツの支配地域にいるユダヤ人の数の多さを考慮すれば適切なやり方とは言えなかつた。こうした手法は、殺害部隊のメンバーたちの深刻な精神的負担となつていくという批判の声が、ますます強くなつていったからだ。

そのためドイツ指導部では、ドイツ国内で障礙者殺害のために使われていた別の手法を用いることが決定された。一月初頭には、短時間で多くの人間を殺害することができる、常設の絶滅施設の建設が始まった。最初の絶滅施設は、ルブリン近郊のペウジェツに建設され、そこにT4作戦の専門家たちがやってきた。彼らは「安楽死」計画の中止後、「東部出動」のためにやってきたのだった。さらなる絶滅施設がウーチ近郊のヘウムノ（クルムホフ）につくられた。この二か所でユダヤ人は、T4作戦の手法、つまりガスによつて殺されることになつていった。

ヒトラーや現地地の責任者たちによる個々の申し合わせや決定は、厳格な機密保持のもと行われていた。だが、ヒトラー自身がこの件について、この時期に何度も詳しく述べている。一〇月二五日、彼はハイドリヒとヒムラーに、次のように言つた。

「この犯罪者の人種（ユダヤ人をさす）は、『第一次』世界大戦では二〇〇万人（ドイツ人軍人）の死に責任があつた。今度『第二次世界大戦』はふたたび、数十万人の死に責任がある。我々は彼らを沼沢地へと送り込むことはできない、などと誰も私に言つてはならない。それならいったい誰が我々の国民の心配をするのだ？ 我々がユダヤ人を根絶するという恐怖が先立つのはよいことだ」。

そしてナチ党のイデオログであるアルフレート・ローゼンベルクは、一九四一年一月一八日、ジャーナリストを前にした演説で、こう述べている。

「東部ではまだ約六〇〇万人のユダヤ人が生きており、この問題はヨーロッパにおける全ユダヤ人の生物学的な除去によつてのみ解決される」。

一二月一二日、アメリカが参戦した翌日に、ヒトラーはナチ党の全国指導者や大管区指導者たちを前に次のように語っているが、ゲッベルスも書き留めているように、その趣旨はいつになく明確なものであつた。

「ユダヤ人問題に関して総統は、ユダヤ人問題を片付けることを決断した。彼はユダヤ人にたいして、もし彼らが再び世界大戦を引き起こすことがあれば、彼らはそのさいみずからの絶滅を体験することになるだろうと予告した。これは空言ではない。世界大戦は起こつたのであり、ユダヤ人の絶滅は、必然的な帰結でなければならぬ。この問題については、あらゆる情緒とは無縁に考えなければならない。我々はそのさいユダヤ人に同情するのではなく、ただ我々のドイツ民族に同情しなければならない。もしドイツ民族が今ふたたび東部の戦場で一六万人の犠牲を払つたのであれば、この血まみれの紛争を引き起こした張本人は、みずからの命をもつてそれを贖わなければならない」。

ヒトラーのこの演説と、そこから引き出される結論について、ハンス・フランクはベルリンから戻ったあと、クラクフでみずからの総督府政府の官僚たちへ次のように報告している。

「だが、ユダヤ人はこれからどうなるんだろうね。彼らがオストラント<sup>⑦</sup>の移住用の村落に収容されると、みなさんは思うかい？ ベルリンでは我々はこう言われたんだよ。なぜ君たちは、こんな面倒ごとで私たちを煩わせるのかね、彼らはオストラントでも帝国弁務官領でも我々の手に負えないのだし、君たち自身で彼らを粛正したまえ！」と。ユダヤ人は我々にとつてもすさまじく有害な大食漢だ。この三五〇万人のユダヤ人を我々は射殺することはできないし、彼らを毒殺することもできないが、なんらかのかたちで絶滅の成功につながるような措置を講ずることはできそうだな。しかも、本国の側で検討される措置との関連<sup>⑧</sup>で」。

#### ヴァンゼー会議

ユダヤ人の命運について決定的な決断がなされた時期は、一九四一年一〇月末から一一月末までのあいだだと断言できる。この時期の終わり頃にあたる一一月二九日、保安警察

と保安部が所属していた国家保安本部の「ユダヤ人問題」担当官はハイドリヒの命令を受けて、この問題に関与していたすべての国家当局に、一二月九日に調整のための会議を開くことを通知した。この会議はアメリカの参戦のため六週間延期され、一九四二年一月二〇日にベルリンのヴァンゼー湖畔の邸宅で開催された。

その目的は、主に三つあった。一つは、参加した関係機関に以下のような新方針を説明し、そのために必要となる措置について調整する必要があった。つまり、ポーランドおよび西欧のユダヤ人は戦後ではなく、直ちに移送を開始すること、しかもその目的地は北部ロシアではなく、総督府に新たに造られた絶滅施設であること。第二に、この件は国家保安本部が指揮監督を行うことについて、ほかの国家当局に確認する意図があった。そして第三に、すでに長いあいだ議論されてきた「二分の一ユダヤ人」<sup>⑨</sup>や、いわゆる混合婚として生活しているドイツ・ユダヤ人の問題も、会議で明確にすることとされた。

この構想では、ユダヤ人を労働動員の対象とすることが重要な役割を果たしていた。会議の議事録には、次のようにある。

「管轄する機関による管理運営のもと、今や最終解決の実施でユダヤ人は、適切な方法によって東部で労働動員に投入されることとなる。労働可能なユダヤ人は、大規模な労働部

# 第三帝国

ある独裁の歴史

ウルリヒ・ヘルベルト

小野寺拓也 訳

統治の全貌が明らかに。

ヒトラーは  
東欧をいかに  
改造したか？



世界最高峰、最新研究に基づく入門書、  
ついに邦訳！ 角川新書 定価：本体1,000円(税別)